ベスト・ノンフィクション

オリンポスの柱の陰に

外交官ハーバート・ノーマンのたたかい

中薗英助

Nakazono Eisuke

現代教養文庫

著者略歴

中薗英助（なかぞの　えいすけ）

1920年　福岡県に生まれる。旧制中学卒業後，旧満州を経て北京遊学。現地邦字紙記者をしつつ文学活動を始める。

1946年　敗戦帰国後もジャーナリスト生活を続け，1950年，「近代文学」に『烙印』を発表して戦後を出発する。
近作の『北京飯店旧館にて』（筑摩書房）で第44回読売文学賞受賞。
主な著書として小説作品に『密航定期便』（新潮社・集英社文庫）『裸者たちの国境』『櫻の橋—詩僧蘇曼殊と辛亥革命』『何日君再来物語』（以上河出書房・河出文庫）『夜よシンバルをうち鳴らせ』『聖樹伝説』『切支丹探偵』（以上福武書店）『密葬者たち』（毎日新聞社）。エッセイ集に『寄留者の歌』（リブロポート）『闇のカーニバル』（時事通信社・第34回日本推理作家協会賞）『私本・GHQ占領秘史』（徳間文庫）『スパイの世界』（岩波新書）ほか多数。

＜お願い＞

☆現代教養文庫の定価は，すべてカバーに明記してあります。
☆万一，落丁乱丁の場合は，直接小社にお送りくだされば早速お取替致します。

©Nakazono Eisuke　1993
Printed in Japan

現代教養文庫　1466　オリンポスの柱の蔭に

1993年11月30日　初版1刷発行

著　者　中薗英助
発行者　宮川安生

発行所　株式会社　社会思想社

東京都文京区本郷3の25の13
電話　(03) 3813-8101（代表）
振替東京 6 71812　〒113

ISBN 4-390-11466-2

双文社印刷所・小林共文堂

文庫

クション

オリンポスの柱の蔭に

外交官ハーバート・ノーマンのたたかい

中薗英助 著

社会思想社

【監修者のことば】

すぐれたノンフィクションは時代の鼓動を伝える。軽い感じのエッセイや紀行文のようなノンフィクションがもてはやされているが、それらは流動食であって、あまり栄養にはならない。

時代に挑み、まるごとその何かを切り取ったノンフィクションこそ、容易にそしゃくし難くても、読者の血となり肉となるのである。

残念ながら、手に入れにくくなっているそれらの作品を発掘し、改めて読者に呈示したい。

このシリーズは決して読者の期待を裏切らないと確信する。何よりも私自身が、ドキドキして読んだノンフィクションばかりだからである。

佐藤信

目次

プレリュード　一九四五年秋・東京　7
第一章　再開　11
第二章　解放者　56
第三章　感傷旅行　102
第四章　迂回路　150
第五章　首席の椅子　211
第六章　内戦　257
第七章　危険な収穫　326
第八章　夏の終り　386

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

インタリュード　冬の軽井沢　434
第九章　逆　風　437
第十章　朝鮮戦争　483
第十一章　審　問　541
第十二章　最初の証言　584
第十三章　スエズ危機　619
第十四章　ナイルの死　656
ポストリュード　一九五七&八五年・カイロ　700
あとがき　705
シリーズのためのあとがき　713
参考文献　717

オリンポスの柱の蔭に

≪主な登場人物≫

ハーバート・ノーマン＝日本学者のカナダ外交官。メソジスト派宣教師の子として信州に生まれ，マッカーサー総司令部要員として初期占領行政に携わる

アイリーン・ノーマン＝ハーバートの妻

志智純久＝経済学者。ハーヴァード大学時代以来のノーマンの親友

ジョージ・モリソン＝アメリカ国務省派遣の知日派外交官

ランディ少将＝マッカーサーの側近ナンバーワン。総司令部民政局長

シモンズ大佐＝民政局次長。ハーヴァード大学出身のニューディール派法律家

北村龍三＝平原現代社会研究所員から出版社社員へ。ノーマンに私淑し，安藤昌益研究の助手となる

奥井美紀子＝北村の恋人，のち妻となる。CCD（民間検閲支隊）電話傍受班のモニター・トランスレーター

秋月達夫＝政治学者，東大教授。安藤昌益研究を援助するとともに，ノーマンの心を許した友となる

遠野市郎＝フランス文学者，東大教授。秋月と同様ノーマンの親友

神川和義＝英文学者。東大教授をのちに辞職。親友の一人

アーネスト・ラティモア＝太平洋問題調査協会 IPR の中心的研究者。中国・モンゴルなど極東問題の権威であり，かつ中央アジア探検家

左近麗子＝銀行家の娘。軽井沢におけるノーマンのテニス友だち

アープ准将＝総司令部 CIS（民間諜報）局長で，ノーマンの直属上司

フレッド・サンダース＝ゾルゲ事件の残党か。謎のリトワニア人亡命者

河野静＝上海帰り。サンダースの内妻

ワシリエフ中尉＝ソ連代表部の補給班勤務。じつは NKVD（内務人民委員部）の情報将校

岡部重之＝上海の元陸軍特務機関員。日系二世 CIC（対敵諜報部隊）将校の情報屋となる

ジョージ・芝田＝第 441 CIC 部隊の日系二世中尉。独立諜報部隊 Z 機関員となる。北村の城西中学時代の同級生

ギャロップ准尉＝CIC の MU80 駐屯隊から Z 機関へ転属したやり手の諜報士官

ブラウン少佐＝CIC 独立遊撃諜報士官からワインダー少将にひき立てられ，Z 機関を編成

ワインダー少将＝マッカーサーの側近ナンバーツー。総司令部 G2（参謀第二部）部長。フランコ崇拝者

レスター・ピアソン＝カナダ外相。カナダ平和外交の立役者

ダグラス・マッカーサー＝連合国軍最高司令官，元帥

プレリュード　一九四五年秋・東京

敗戦後、中国から引揚げてきた私は、ＭＰが踊るように派手な身ぶりで交通整理をしている日比谷交叉点のお濠端から、第一生命ビル屋上にひるがえる星条旗を見たときの衝撃を、四十年近くたったいまも忘れられない。

あたりは、焼けビルばかりで見る影もなかった。爆撃をまぬがれた十二階建の第一生命ビルだけが、色あせた皇居前広場の常磐木とは対照的に、微動だもしなかったようにがっしりと立っていた。

マッカーサー元帥があそこにいる！

第一生命ビルに、ひときわ荘重な風趣と威厳とをあたえているのは、表玄関に立つギリシア神殿風の巨大な御影石の柱だ。

柱はお濠の日本的風景との調和を考慮して、円柱ではなく角柱にしたというが、その十本の傲然と立ちならんだ柱の向う側は、当時の私たち日本人にとって神聖冒すべからざる殿堂だった。

新しい神々の住まい給う、聖域にほかならなかった。とりわけ、ゼウス神にも比されるべきマッカーサー元帥の姿を一目見ようとして、群衆は階段下に集まって、その登場を待ちうけたものであ

る。

マッカーサー元帥は、毎朝ほぼ午前十時、宿舎にしていた虎の門の米大使館を、五つ星の元帥用標識を付けた黒光りするキャデラックに乗り込んで出発、次々と青信号に替わる交叉点をノンストップで通過し、最後に祝田橋交叉点から日比谷交叉点を抜け、第一生命ビルの表階段下に到着する。時間にして五、六分だ。

元帥は名優のように悠然と階段を上り、大股に柱の間をくぐり抜けて、ビル内へ入る。

出迎えた副官は巨人の歩度にあわせて小走りにつづく。正面カウンターと右手オフィスとの間の通路を通り、奥の専用エレベーターで六階へ。

マッカーサーの執務室は、もと社長室だ。参謀長は右となりのもと会長室に入ったが、その奥の和室では、東部軍管区司令官田中静壹大将が米軍進駐直前の八月二十四日夜に自決した。

元帥が、なかなか首をたてにふって入ろうとしなかった小暗い社長室だ。渋い色調のアメリカ産くるみ材の壁。床板には黒檀の模様板がはめこまれている。

ヨーロッパ近世風の雰囲気だ。新しい主人はしだいに部屋に似合ってきて、のちに大貴族などと呼ばれるようになる……。

執務室に入ると、緑がかった大理石の置時計にちょっと視線を投げかけてから、東南の窓を背にして大デスクに向い、腰をおろす。背後の窓際の柱には、これもいたく気に入った十九世紀末イギリスの風景画家オールドリッジの『アドリア海の漁船』と題する水彩画がかかげられている。

側面の壁には、同じ画家の描いた一隻のヨット。引潮に乗り、帆に風を一杯はらんで外洋へと帆走する孤独なヨットの姿は、孤独な元帥の心をいっそう慰めてくれた。

信任厚い高級副官のバンナー大佐が、ノックして入ってくる。書類をデスクにさし出して帰ろうとするのを、マッカーサーは止めた。

「そのまま待ちたまえ、大佐」

「はい、元帥閣下」

マッカーサーは、すでによく内容を熟知しているもののように、書類にすっと眼を通してからサインした。

そのようにしてサインした数々の書類の中に、地軸をゆるがすようだといわれたほど力強くかつ美々しい麗句を連ねている、〈連合国の日本占領の基本的目的と連合国軍によるその達成の方法に関するダグラス・マッカーサー元帥の管下部隊に対する訓令〉と題された、次のような全軍に対する訓令もあったのである。

……完全に敗亡した敵に対しそのやり方の誤りをただし、かつ世界において尊敬を受ける地位を回復するために与えられつつある機会が、ここに極めてはっきりと述べられるであろう。

連合国軍最高司令官の日本に対する権限は、降伏条項及びポツダム宣言の条項を実施するために完全なものとして引証される。日本及びその国民に対する管理は、実行可能な最大限度まで降伏条項に規定されている目的に適すると認められる天皇その他の日本政府機構を通じて行われるであろう。

連合国の政策が従うべき日本に関する究極の目的は、次の通りである。

日本が、再び世界の平和及び安全に対する脅威とならないことを確実にすること。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

他国の権利を尊重すべき平和的かつ責任ある政府を樹立すること。最終的に決定される政府は、国際連合憲章の理想及び原則に反映されている最高司令官の目的を支持するであろう。この政府は、できるだけ厳密に民主主義的自治の原則に合致するものでなければならない。政府のとる形態は、固定のものでも不変のものでもない。自由に表明された国民の意志に支持されないいかなる政治形態をも日本に強いることは、ポツダム条項に反する。

……

日本は、完全に非武装化され、かつ、非軍事化されるであろう。軍国主義者の権威と軍国主義の勢力は、日本の政治的、経済的、社会的生活から全面的に除去されるであろう。軍国主義と侵略との精神を表現する諸制度は、強力に抑圧されるであろう。

日本国民は、個人的自由への希望及び基本的人権、特に宗教、集会、言論及び出版の自由の尊重を発展させるように奨励されるべきである。民主主義的かつ代議的組織の形成が奨励されなければならない。

第一章　再　会

1

北村龍三は、お濠端の歩道を何度か往復したあと、ついにＧＨＱへ入って行く決心をした。

交叉点をわたり、表玄関の階段を上ると、第八軍のワッペンを付けた見上げるような大男の衛兵が、ニコリともせずに彼を見下ろした。北村は緊張した。ポケットから取り出して見せるべき身分証明書のようなものは、何もない。たとえ米の配給通帳を持ち合わせていたとしても、ここでは役に立つまい。

彼は本土決戦に備えて、房総半島の突端に近い館山で、タコ壺同然の防空壕掘りをやらされていた復員兵だった。

いつもはそれとわかるくたびれた兵隊服で歩いていたが、その日は一張羅の古セビロを着こんでいた。

足が、ふるえ出しそうだった。このまま、回れ右をして逃げて帰りたかった。

「入れ！」

衛兵は口を開いて顎をしゃくっただけだが、頭上に稲光りが閃き雷鳴が落ちたようだった。御影石の柱の間を抜けて行くとき、まるでドブ鼠のように惨めだった。重たいドアを押し開くと、そこは別世界だった。

高い天井をもったロビーは、まぶしく光り輝き、豊かさと香りがあった。正面カウンターの奥で、婦人も交じるパリッとした制服の将兵が忙しそうに立ち働き、商社のように英文タイプライターをたたく賑やかな音がした。

カウンターの向うにいる日系二世のGIに英語で話しかけると、相手は聞き取りにくそうに小首をかしげてから、日本語で返事した。

「あなた、何用ですか？　ニホン語で話してもよいですね」

「はい。では、面会です」

「メンカイ……だれに？」

「ハーバート・ノーマンさんに。ぼくはキ・タ・ム・ラ、です」

「ハーバート・ノーマン!?」

GIは反問してから、すぐどこかへ電話をかけた。

三分とたたないうちに、ノーマンがロビーに降りてきた。

将校用の軍服の肩に、黒地に白く〈CANADA〉と書いたワッペンをつけたノーマンだった。まる四年前、戦争の始まるすこし前、太平洋問題調査協会の事務局に勤めていたころ知りあったときは、いかにも青年外交官らしく、痩せてスマートな長身だったが、いまは毛のもこもこする無骨なカナダ軍用冬服に包まれていたためか雲をつく巨漢に見えた。

「やあ！　北村さん、いらっしゃい」
おぼえていてくれたかどうかも疑わしかったのに、ノーマンは昨日別れた人のような親しみを満面に浮かべただけではない。彼の肩をしっかり抱くようにしながら、右手の階段の方へみちびいた。
「北村さん、おぼえていますか？　日比谷公会堂の音楽会の舞台に、自来也芝居のお化けみたいな鼠が出たことを」
三十年以上も信州で伝道したカナダ・メソジスト派宣教師の息子だったハーバート・ノーマンの日本語は、あい変らず日本人はだしの達者なものだった。
「ええ、おぼえておりますとも。あれは、とんだ余興でしたね」
新響演奏会の夜だった。
演奏中に舞台のすそを、黒い大きな鼠が走り抜けて行った。休憩時間にばったり顔をあわせた二人は、あきれたようにそれを話題にしたのだった。思いもかけぬ余興は、間もなくやってくる十二月八日の不吉な前兆にほかならなかった。
ノーマンは憲兵の監視付で、公使館内に抑留され、半年後、交換船浅間丸で本国へ帰った。北村龍三は応召して東京を去り、はなればなれになってしまった。
「もうお化けは消えてしまいました」
と彼は、青い目をくりくりさせながらいった。
「そうですね。二度と出てこられないでしょう」
中等学校以上の卒業者に資格のある幹部候補生には志願せず、召集された一兵卒として押し通し

た北村は、返事に力をこめていった。

「そうです。わたしたちはふたたびこうして会うことができました。もし必要なら、明日も、明後日も会えるでしょう」

二人は、二階のイタリア産大理石を敷きつめた廊下を歩いて行った。

片側は一階のロビーから吹き抜けになっていて、一階の床に歌舞伎の名優市川団十郎の家紋がデザイン化されているのが見下ろせた。

大勢の将校やGIたちが働いている広いオフィスを通り、誰もいない、デスクと椅子だけおいた殺風景な十畳ほどの応接室に案内された。大部屋を抜けるとき、ノーマンは気軽に金縁眼鏡をかけた大佐に北村を紹介した。日本軍の司令部では、考えられないことだった。

彼の所属する部署は、シビリアン・インテリジェンス・セクション――民間諜報局、通称CISということで、応接室は日本人の訊問や聴取に使う場所らしかった。

諜報という言葉から連想される暗い翳はなかったものの、北村は事情がわかってくるにつれてヒヤリとした。

民間諜報局はG2、参謀第二部の幕下(ばっか)にあり、主として日本人が占領政策を忠実に守っているかどうかの情報の収集と分析、さらに警察など刑事公安機関との連絡を担当した。アープ准将が局長で、ノーマンは初代の調査分析課長として少佐一人、大尉一人、中尉五人、兵士二十五人もの部下を使う中佐待遇文官の責任者だった。

もともとノーマンは、カナダ民間人抑留者帰国促進のためにカナダ外務省からマニラへ派遣され、進駐米軍とともに東京へ入ったところを、すでに名著『日本における近代国家の成立』で知ら

れた歴史学者としての該博な日本知識と流暢な日本語とをGHQに買われ、カナダ政府から借り出された出向要員として勤務することになったのであった。

とつぜん、部屋のドアをノックもせずに闖入してきた高級将校がいた。襟には二つ星。少将だった。

金髪を中央から一本の乱れもなく分けた少将は、広い額の下の鉤鼻の付け根に左右から寄り目になった鋭い視線で、北村を射すくめるように見た。

ノーマンは腰を下ろしたまま、早口で何かやりとりをしてから立ち上った。相手の非礼さをとがめるよりも、彼を紹介しようとしたのだ。

「将軍……友人のミスター北村をご紹介しましょう」

「ノー。その必要はない」

少将は顎を突き出してにべもなく断わり、踵を返して出て行った。

「誰ですか、あの人は？」

と、北村はすぐにたずねた。

「参謀第二部長のワインダー少将ですよ。ときおり、ああやって五階から降りてきて、オフィスの中を散歩するんです」

ノーマンは肩をすくめて答えた。

2

ワインダー少将は、五階へ帰るエレベーターの中で、手を軽くあげて頭髪のふくらみ具合を直し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton